

面に關する著書を有して居るが此度その論文を集めて神事、風俗、歴史、隨筆の四篇としその三篇が今世に出たのである。その内容を一々紹介することは出来ないが叙述は極めて可易であり取材も廣汎で我々が民俗について注意しそうな問題は大概これを取扱つてゐる。

この學問は我が國に於て短い歴史——その萌芽は既に久しくあつたとしても——しかもつてゐない。いはゞ新興の學問である。従つてそこには潑刺たる元氣また學としての不整頓が豫想せられるのであり本書の内容もこの豫想を裏切るものではない。人はそこに多くの興味ある思ひ付きを發見するに共にその論證の不充分について一種の物足りなさを感じるであらう。即ち問題の取扱ひがなほ羅刻的であり概念の分析が嚴密でない。これは民俗學が學問として未だ明確なる體系を有たないことを一の原因としてゐる。我々は著者が斯學の爲に拂はれし多年の努力を感謝するに共にその結果については斯の如く感ずるを禁じ得ないものである。これらの點に於て著者の自重し斯學にたづさはる新進學徒の努力を期待する

ものである。(四六版各篇四五〇頁内外、定價各三・二〇 東京大岡山書店發行)〔肥後〕

● 後法興院記

本書は關白近衛政家の文正元年二十一歳の時より永正二年六十二歳即ち其の薨年に及ぶ全部三十卷の日記で、世に寫本が乏しく學者の之を見るに容易でないのを遺憾とし、此度平泉澄博士が主となり、近衛公爵家に藏せられる原本により嚴密なる校正を加へて之を印刷し廣く學界に提供されるに至つたのである。本日記は其間多少の中斷は有るが、戰國時代の世狀、公家の生活、信仰等を窺ふべき貴重なる史料であつて、此の公刊が學界を裨益するにこの多大なるは言ふ迄もないことで、吾人は博士始め校正等に當られた人々の勞苦を多しせなければならぬ (菊版上下二卷一五三〇頁、東京至文堂發行、價八圓)

● 王朝教育史資料

春山 作樹編

本書は日本教育史を修める學生の演習用として王朝教育史の資料となるべきものを諸書より拔萃輯録したものであつて、字體を古書の儘とし、又訓點をも除きたる白

文である。その内容は、令義解抄本、類聚三代格抄本、類聚符宣抄々本、大學式、山家學生式、綜藝種智院式並序、清行朝臣意見十二箇條抄、日本書紀抄、續日本紀抄、日本後紀抄、續日本後紀抄、文德實錄抄で、固より王朝教育史資料の全部ではないが、教育史を修める學生が古書を読む演習用として恰好のものである。(菊版九一頁、東京長崎書店發行、價壹圓)(以上松野)

●蒙古史研究

箭内 互著

故箭内博士の數々の業績が、博士の高弟たる岩井、石田、和田三學士の甚大なる努力によつて千二百頁の彪大なる『蒙古史研究』となつて先般上梓され、吾人の机上を飾る事になつたのは、實に近年に於ける塞外史研究上の大收獲の一と云はねばならぬ。今他國の事は措いて問はず我國に於ける眞の蒙古史—元史研究の由來を尋ねるに、之は決して古いものでなく、大體に於て明治後期に其端を發する。前清翰林學士文芸閣先生が我邦に來遊されたのは明治三十二年の事にして、かの蒙文元朝祕史を我に傳へられたのは三十四年暮の事であつた。これが抑々

我國に於ける蒙古史研究をして大發展せしむる緒となるものであつて、遂に明治四十年初頭故那珂博士の名著「成吉思汗實錄」の出るに至つて果して新しい飛躍がみらるるに至つたのである。故那珂博士の勞業は其以前にも有つたが、右實錄の出現が蒙古史研究に對して一轉機を與ふる事になつて此に新しい研究時代が作り出された事は否まれぬ事であらう。然し不幸にして同博士は幾くもなくして他界された爲、同博士の事業は再びみる事を得なくなつたが、やがて東都に於てよく此事業を紹繼し之をして第二期の發展を遂ぐるに至らしめた人は、乃ち故箭内博士に外ならない。實に故箭内博士は第二期蒙古史研究家の一人であり、東都に於て先人那珂博士のよき後繼者であつた事は何人も疑はぬ所である。

故箭内博士の研究は本書序文に白鳥博士の説かるる如く、又故博士の業績の示す如く、確かに蒙古—元朝の制度に關係した方面に、蒙古滿洲を中心とする歴史地理的方面にが主流をなして居る。後者は故博士が永く滿鐵歴史調査部の一員として研究された爲の必然的な業績にも